



**Data** 2022-53

監督・脚本：ミア・ハンセン＝ラブ  
出演：ウィッキー・クリープス／テ  
イム・ロス／ミア・ワシコウ  
スカ／アンデルシュ・ダニエ  
ルセン・リー

## 👁️👁️ みどころ

コルシカ島はナポレオンの生誕地として、セントヘレナ島は彼の流刑地として、また、小豆島は『二十四の瞳』（54年）の舞台として有名だが、ベルイマン島とは？

それは、スウェーデンの巨匠イングマール・ベルイマンが生活すると共に多くの作品の舞台にしたフォーレ島の別名で、同監督の聖地だ。すると、アメリカからここを訪れて滞在すれば、中年の映画監督カップルの製作意欲も夫婦仲も良好に・・・？

それがちょっと甘いことは、“離婚部屋”を含むベルイマンのプライベートを垣間見れば明らかだが、聖地巡礼の傍ら、妻が執筆した“劇中劇”の出来は？ ちょっと拍子抜け感もあるが、機会があればぜひ私もこの島を訪れたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ベルイマン島とは？イングマール・ベルイマン監督は？■□■

コルシカ島はナポレオンの生誕地として、またセントヘレナ島は彼の流刑地として、私もよく知っているが、ベルイマン島ってどこにあるの？なんで有名なの？そんなタイトルをつけた本作は一体何の映画？

スティーブン・スピルバーグやマーティン・スコセッシ等の世界の巨匠に多大な影響を与えた、と言われているスウェーデンの映画監督イングマール・ベルイマンをあなたは知ってる？『野いちご』（57年）や『処女の泉』（60年）等の名作でさまざまな賞を受賞したスウェーデンの巨匠として私も知っていたが、彼はスウェーデンのフォーレ島でさまざまな映画を作り、生活もしていたらしい。そのため、今やフォーレ島はベルイマン島と呼ばれ、ベルイマン監督の“聖地”として巡礼ツアーまで組まれているらしい。なるほど、なるほど。

本作は、夫・トニー（ティム・ロス）と妻・クリス（ヴィッキー・クリープス）の“映画監督カップル”がベルイマン島を訪れるシークエンスから始まる。彼らは自分たちの次回作の企画を練るために、子供を預けて、わざわざアメリカからベルイマン島にやってきたそうだが、さて、その目的の達成は・・・？

## ■□■ “離婚部屋”は縁起が悪い！2人はどこで執筆を？■□■

広々とした庭と風車小屋付きの、ベルイマンなじみのお屋敷に長期滞在することになった2人は“離婚部屋”と呼ばれる部屋の説明もされたが、それはなぜ？離婚部屋はさすがに縁起が悪そう（？）なことと、風車小屋が気に入ったこともあって、クリスはわざわざ風車小屋内の小さな書斎で執筆活動をすることに。

説明によると、ベルイマン監督にはたくさんの妻とたくさんの子供がいたらしい。そして、お仕事優先の彼には子育ては全くできなかったらしい。すると必然的に、仕事上の業績は残せても、家族的には・・・？そんな話は、2人の映画監督カップルにいかなる影響を？ベルイマン島観光（聖地巡り）をしながらそれぞれの次回作の構想を温めていくストーリー展開の中で、そんな興味が少しずつ広がっていくが・・・。

## ■□■ どちらの“聖地巡り”がホンモノ？■□■

本作のベルイマン島は、日本で言えばさしずめ小豆島。ここは、壺井栄の原作小説を、木下恵介が映画化した名作『二十四の瞳』（54年）（『シネマ13』346頁）の聖地だ。中学時代にここを旅行した私は、小豆島特産のオリーブをたっぷり味わいながら、聖地巡り（？）を楽しむことができた。本作でもトニーが参加した聖地巡礼のバスツアーにおけるガイドの説明を聞いていると、フォーレ島でベルイマンがいかなる生活をし、いかなる映画制作活動をしていたのかがよくわかる。

他方、あまり夫と協調せず、独自行動が多いクリスは、自分1人で動いているからアレ。しかし、本作ではトニーよりもクリスの方が、ベルイマンの孫（？）との出会いの中で本当のベルイマンに近づいていくことになるので、それに注目！“聖地巡り”はどちらがホンモノ？こんな展開になれば、せつかく2人でベルイマン島にやってきても、逆に夫婦の危機が？

## ■□■ 劇中劇は面白い！そのドロドロ感は？■□■

そんな邪推（？）をしていると、本作後半からは、クリスが構想半ばまで完成した脚本をトニーに語り、トニーの意見を聞くための“劇中劇”になっていく。その劇中劇のヒロインとして登場するのが私の大好きな女優ミア・ワシコウスカだが、そのストーリーは？

劇中劇は面白い！それは『恋に落ちたシェイクスピア』（98年）等で明らかだが、本作でクリスが語る劇中劇は、友人の結婚式のためにある島にやってきたエイミー（ミア・ワシコウスカ）が、花嫁やかかつの恋人たちの間でいろいろとややこしい関係になっていくものだから、かなり厄介だ。基本的には明るい雰囲気脚本だが、他方でドロドロ感（？）も・・・？

## ■□■やっぱりベルイマン島は離婚島？いやいや、結末は？■□■

それはともかく、ベルイマン島への到着以降、見え隠れするトニーとクリスのごちなさ、クリスが構想している新作ストーリーのドロドロ感(?)を見ていると、やっぱり私の予想通り、ベルイマン島は“離婚島”・・・？ラストに向けて、トニーが先に1人で島を離れていく展開になると、はっきりそんな感じになっていく。ところが、最後にはトニーが子どもを連れて再びベルイマン島に戻ってくるから、めでたし、めでたし。しかしそれでは、本作は一体何を言いたかったの？私にはイマイチそれが納得できなかったが・・・。

2022（令和4）年5月1日記